Museum News

絵：柳田 基

2015 春学期
展覧会 / 講演会

平常展
Gift for the Future
関西学院のあゆみ
－学院創立にかけた情熱－
同時開催 特集陳列
時計台を描く
2015.2.23（月）▶ 5.9（土）

Gift for the Future
関西学院のあゆみ
－新制中学部の誕生と草創期－
1947.4 ～ 1951.3
2015.7.27（月）▶ 10.10（土）

企画展
愛新覚羅家の人びと
－相依為命－
2015.5.18（月）▶ 7.18（土）
※詳しくは 4 ページをご覧ください。

講演会※
第１回
朗読講演「流転の子 最後の皇女・愛新覚羅嫣生－語り継ぐ歴史」
講師：本岡典子氏　ノンフィクション作家
2015.5.30（土）13:30 ▶ 15:00
会場：西宮上ケ原キャンパス 社会学部 101 号教室

第２回
「愛新覚羅家の人びと」
語り手：福永嫣生氏　愛新覚羅溥傑次女
聞き手：本岡典子氏　ノンフィクション作家
2015.6.20（土）13:30 ▶ 15:00
会場：西宮上ケ原キャンパス 社会学部 101 号教室

※講演会は申し込み制です（300 名）
以下の URL から Web サイトにアクセスして、お申込ください。
http://museum.kwansei.ac.jp/aishinkakura/

関西学院創立 125 周年を記念して

2014.9.28 に大学博物館開館

時計台に大学博物館を開設

関西学院は 1889 年に神戸の原田の森（現在の王子動物園辺り）に創立され、1929 年に西宮の上ケ原へ移転しました。上ケ原キャンパスを設計した建築家の W.M. ヴォーリズ（1880-1964）は、甲山を背景に、時計台、中央芝生、正門を軸線で結び、その左右に学舎や講堂を配置しました。時計台はその中心に位置し、当初から図書館として利用されてきましたが、1997 年に新図書館が開館して、時計台は図書館の役割を終えました。その後も時計台は西宮上ケ原キャンパスのシンボルとして親しまれ、2009 年には国の登録文化財に登録されました。

そして、このたび関西学院創立 125 周年を記念し、2014 年 9 月 28 日（創立記念日）に新たに大学博物館として開館しました。

キャンパスがミュージアム

西宮上ケ原キャンパスは、緑豊かななかに赤瓦とクリーム色のスタッコ塗壁で統一されたスパニッシュ・ミッション・スタイルの校舎が建ち並ぶ美しいキャンパスです。さらにキャンパスにはキリスト教美術から現代アートまでさまざまな美術品が点在しています。まさに、キャンパスがミュージアムなのです。

大学博物館では、ヴォーリズの建築や点在する美術品などに親しんでもらえるように、スマートフォンで気軽にアクセスできる“かんがく おさんぽ帖”というサイト（http://museum.kwansei.ac.jp/osanpo/）をつくりました。

校内を散歩しながら、スマートフォンを片手に古い時代の校舎の写真を見たり、美術品の解説を読んだりして、関西学院の歴史や美術にふれていただきたいと思います。

多彩なコレクションによる大学らしい博物館をめざして

大学博物館の開館にあたっては、2008 年 4 月に博物館開設準備室が設置され、5 年間にわたり準備を進めてきました。その間にさまざまな方面から博物館の展示に欠かせない貴重な資料を収集することができました。これらはすべて寄贈によるものです。まずは関係者の皆さまに御礼を申し上げます。

また、関西学院のアーカイブ機能を担ってきた学院史編纂室が大学博物館の組織として統合されました。学院史編纂室では、これまでも同窓をはじめとする多くの方々からのご支援のもとに、関西学院の歴史に関わる資料を集めてきましたが、さらに今後も資料の充実に尽力してまいります。

平常展と企画展

大学博物館では、平常展と企画展の２種類の展示を開催します。「関西学院のあゆみ」とタイトルを付けた平常展は、年に 3 回程度の展示替えをおこないながら、本学の歴史や伝統を紹介します。

いっぽう、企画展は春学期と秋学期に 1 回ずつの開催を目途に、大学が収集してきた歴史、文化、美術などの貴重な資料を公開します。

平常展と企画展では、展示される資料の内容が異なりますが、いずれの展覧会を通しても新たな出会いがあることでしょう。博物館と言えば、過去の遺物ばかりが陳列されている印象がありますが、過去を懐かしむだけの場ではありません。展示資料には、さまざまな情報が含まれています。人とモノとが出会い、知性と感性が融合する展示空間をつくっていきたいと思っています。

（大学博物館長　河上繁樹）

展覧会報告 I

平常展
未来への 125 年
– 関西学院のあゆみ –

関西学院の礎を築いた４人の院長のゆかりの品々、原田の森から上ケ原へ移転し発展していくキャンパス、そこで過ごす学生たちの姿などを写真や資料によって紹介。

2014.9.28（日）▶ 11.22（土）
9:30～16:30（日曜休館 但し９月28日を除く）

開館日数	47 日
入館者数	5,050 人

関西学院の歴史と伝統を伝える平常展

未来への 125 年

関西学院は、昨年の９月 28 日の創立記念日に 125 周年を迎えました。当初、わずか 19 人の学生から出発した小さな学校でしたが、現在では７つのキャンパスを有し、幼稚園から大学院まで学生数２万８千人を有する総合学園となりました。

大学博物館の最初の展示は「未来への 125 年 - 関西学院のあゆみ -」と題する平常展です。移り変わるキャンパスや学院で過ごす学生たちの姿などを写真資料を中心に紹介し、また初期の４人の院長ゆかりの品々や大正期の原田の森キャンパスを撮影した貴重な映像、本学卒業生の絵画作品など約 100 点の資料で構成しました。

関西学院がこれまで歩み、培ってきた 125 年の歴史と伝統は、未来への贈り物です。

移りゆく関西学院

原田の森から上ケ原へ

関西学院は、アメリカの南メソヂスト監督教会によって 1889 年に神戸原田の森（現在の神戸市灘区、王子動物園周辺）に創立されました。創立当初、２棟の木造校舎から始まった学舎も、カナダメソヂスト教会の学院経営参入を経て、1912 年に神学館が完成し、その後続々と校舎が建築されました。その設計を担当したのは、キリスト教伝道者であり、建築家でもあったアメリカ人の W.M. ヴォーリズでした。煉瓦造りの重厚な校舎や木造コロニアルスタイルの建物が混在するミッションスクールらしい景観は日本一美しいキャンパスと評されました。カナダメソヂスト教会の参入は、施設面だけでなく、学院の教育水準も引き上げました。高等学部が開設され、学生自治の場として学生会が作られたのです。

1929 年、関西学院は大学昇格を目指して、西宮の上ケ原へ移転、キリスト教主義による教育理念を具現化したキャンパス設計は、再びヴォーリズに委ねられました。スパニッシュ・ミッション・スタイルに統一されたキャンパスは、現在の関学のイメージを築きました。1932 年には大学開設が認可され、それに伴いオリジナリティーのある新たな校歌が求められ、現在の校歌「空の翼」が発表されます。当時の関学は学生会活動が活発で、大学昇格問題も新校歌誕生の裏にも学生会の働きがありました。そこには教員と学生の呼応が見られます。

第２次世界大戦中には、長年学院を支えてきた外国人宣教師全員が学院を去り、アメリカ・カナダ・日本の三ヶ国協力のもとに成っていた学院運営が日本人の手に委ねられることになりました。時計台に掲げられた “Mastery for Service” のエンブレムも撤去されてしまいます。

戦後は再生へと歩み始めますが、大学紛争や阪神・淡路大震災などの試練にもみまわれ、再び改革と創造の道を歩みだしました。

そして 2014 年、関西学院は創立 125 周年を迎えました。125 年の歴史を年表仕立てで見ていただく展示構成としました。

学院を築いた４人の院長

Spirit for the Future

展示室３では、関西学院の礎を築いた４人の院長のゆかりの品々を展示しました。

関西学院の創設者で初代院長の W.R. ランバスは、宣教師であるとともに医師として世界を巡り、教育や医療を通じて苦しむ人びとに仕えました。本学には愛用の聖書や医療用の薬入れが伝えられています。

第２代院長の吉岡美国は、「敬神愛人」の心で学生たちに愛情を注ぎ、苦学生のために自助会をつくり牛乳販売の手助けをしました。その時のスタンプが今も残っています。

創立後離日したランバスに代わって、教育に尽力した第３代院長の J.C.C. ニュートンは学生から「育ての親」と親しまれました。教え子たちはニュートン帰国の記念としてアルバムを贈り、そこには当時の様子を写した想い出の写真がニュートンの手により貼られました。

スクールモットー “Mastery for Service” を提唱した第４代院長 C.J.L. ベーツは、大学昇格に奔走し、20 年間も院長として学院の発展に貢献しました。趣味で絵を描いたベーツは、宣教師館からの眺めを水彩画に残しています。

左からベーツ、吉岡、ニュートン、ランバス

展覧会報告 II

企画展
聖なる光に照らされて
聖書から生まれた美

大学博物館最初の企画展は、第４代院長 C.J.L. ベーツが残した言葉 “Keep This Holy Fire Burning（聖なる光を灯し続けて）” をもとに、聖書とそこから生まれた絵画やクリスマス切手を取り上げました。

2014.12.1（月）▶ 2015.2.14（土）
9:30 ～ 16:30（日曜、冬期休暇、入試期間中は休館）

開館日数	47 日
入館者数	1,896 人

グーテンベルグの「42 行聖書」など

大学図書館所蔵の聖書

キリスト教主義に基づく教育を掲げる本学にとって、聖書は基礎となる書物です。大学博物館の最初の企画展として聖書を主題にした展覧会はもっとも関学らしい企画です。

本学の図書館では、15 世紀半ばに活版印刷を発明したグーテンベルグによる『42 行聖

書』、ルネッサンス期の人文主義者エラスムスによって校訂されたギリシア語の新約聖書、イギリス王ジェームズⅠ世の命によって初めて英訳された『欽定訳聖書』など、世界的にも貴重な聖書を所蔵しています。

今回の企画展では、世界で最古とされるヘブライ語の聖書「死海写本」のレビ記断片をはじめ、15-16 世紀の聖書や時祷書など８点が出品されました。印刷技術の発展にともなって、各国で聖書が出版されました。

渡辺禎雄の型染版画

尾頭付きの鯛で最後の晩餐

日本でもキリスト教が普及するにつれ、日本人の作家によって聖書の物語が絵画化されるようになります。渡辺禎雄（1913-96）は、柳宗悦の民藝思想に感銘を受け、同門の型絵染作家芹沢銈介の指導のもとで渡辺独自の型染版画を完成させました。

イエスの受難物語として重要な《最後の晩餐》では、イエスと弟子たちが卓を囲っていますが、その卓のうえには尾頭付きの鯛がのっています。卓もよく見れば、大きな炬燵のように見えます。イエスを裏切ったユダは、背に金貨の入った袋を隠し持っています。渡辺

は、聖書の物語を日本の文化的風土に置き換えながら、時にユーモアをまじえて表現しました。

今回の展示では、渡辺の版画によってイエスの生涯をたどることができるように構成しました。また、神戸ゆかりの小磯良平、田中忠雄、堀江優の３人のキリスト教美術家による平和の祈りが込められた作品も出品されました。

地域色がにじみ出た

世界のクリスマス切手

関西学院の OB で牧師として活躍してこられた播磨醇氏は、50 年以上にわたって世界のクリスマス切手を収集されてきました。今回の展示期間がアドベントに重なることから、播磨氏の協力を得て、バチカンをはじめ、ヨルダンやギリシャ、キプロス、オランダ、ドイツ、スイス、フィンランド、ブラジルなど世界各国の地域色がにじみ出た珍しいクリスマス切手を展示することができました。

開催記念講演会

聖書による美と平和への祈り

会期中の 12 月 13 日（土）には、本展覧会の監修者で本学神学部教授の神田健次先生による「聖書による美と平和への祈り」と題する講演会が開催されました。

神田先生は、冒頭に展覧会のテーマの「聖なる光」が福音書のいう人間を照らす「命の光」であると同時に、ベーツ院長が残した言葉 “Keep This Holy Fire Burning” を引用され、関西学院の歴史に刻まれた言葉であると述べられ、展覧会に出品されているキリスト教絵画やクリスマス切手を取り上げながら、丁寧に解説をされました。

次回の企画展

愛新覚羅家の人びと

あい　しん　かく　ら

—相依為命—

あいよっていのちをなす

2015年
5月18日(月) → 7月18日(土)

関西学院大学（博物館開設準備室）は、2013年10月に西宮市在住の福永嫣生さんより愛新覚羅溥傑家に関する手紙や写真、書画などの貴重な資料を受贈しました。

愛新覚羅溥傑（1907 − 94）は、中国・清朝最後の皇帝溥儀の実弟で、「満州国」軍人となり、昭和天皇の遠縁にあたる嵯峨浩と結婚し、二女に恵まれました。嫣生さんはその次女です。

日本の敗戦後、溥傑はソ連・中国に収監され、嫣生さんは母とともに中国大陸を流転した末に日本へ引き揚げました。それから16年が経った1961年に、ようやく父との再会を果たしました。

今回の展覧会では、時代の波に翻弄されながらも、日中友好に尽力した一家の物語を二つのテーマのもとにご覧いただきます。

一つは「愛新覚羅家のあゆみ」。溥傑一家が過ごしてきた日々は、戦中・戦後という激動の時代でした。政治目的で画策された溥傑と浩の結婚、日本と満州という「国際」結婚であったが故に訪れた敗戦後の「流転」の日々、離れ離れになった家族の再会、そして日中国交正常化…。そうした状況のなかで愛を育んできた家族の想いを展示資料からうかがいます。

もう一つは「愛新覚羅家の人びと」。溥傑・浩夫妻、二人の子である慧生・嫣生それぞれの活動に焦点を当て、ゆかりの品々を紹介します。４人の活動は、時には離れ離れになった家族の交流を生み、時には日本と中国のかけ橋となりました。

副題の「相依為命」は、溥傑がよく口にした言葉で「時代は変わっても、相手を思いやる気持ちがあれば生きていける」という意味が込められています。本展覧会がさまざまな人びとを思いやる機会になれば幸いです。

2015 秋学期
展覧会 / 公開研究会

企画展
原野コレクションIII 蔵書票（仮）
－原野賢吉、コレクターとしての軌跡－
2015.10.19（月）▶ 12.12（土）

蔵書票はその書物が誰のものであるかを示すことを目的に書物に貼られる名札のような紙片です。名札といっても単に名前や雅号を書いた紙ではなく、時には所有者の好きな言葉やモットーが添えられ、また趣向を凝らした絵柄で装飾されるなど美術的側面が強く、「EX LIBRIS（エクスリブリス）」と呼ばれて世界的に親しまれています。本展覧会では、原野賢吉さんが長年かけて蒐集したコレクションをご覧いただきます。

平常展
Gift for the Future
関西学院のあゆみ
－新天地・上ケ原に馳せた夢－
同時開催 特集陳列
ヴォーリズの学舎（仮）
2016.1.6（水）▶ 2016.3.26（土）

公開研究会
第１回
（仮）アンデスの織物を観る
講師：河上繁樹　関西学院大学博物館長
アンデスの染織品の実物を目の前にしながら、織物の拡大写真を写して、さまざまな織り方を観察します。
2015.11.28（土）13:30 ▶ 15:00
会場：関西学院大学博物館実習室
参加費：無料

関西学院大学博物館通信　第１号
KGU MUSEUM NEWS No.1
2015.5.1

関西学院大学博物館
〒662-8501
西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054　FAX 0798-54-6462
URL http://museum.kwansei.ac.jp/